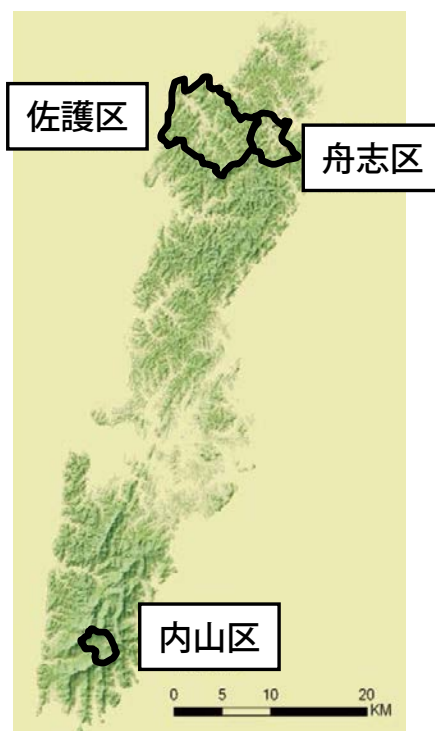


ツシマヤマネコと共生する暮らしのヒント

対馬の魅力を活かした地域づくりの実践として、ツシマヤマネコをテーマとした様々な活動が始まっています。環境省では、対馬野生生物保護センターが中心となって、ツシマヤマネコの保護や飼育、森づくり、普及啓発などを進めてきたほか、佐護区、舟志区、内山区をモデル地区として設定し、地域と協働でツシマヤマネコと共生する地域社会づくりを進めてきました。

このモデル地区での活動を中心に、ツシマヤマネコと共生する地域社会づくりの取り組みが島内に広く発展していくよう、「森」「農」「里」というそれぞれの環境別の多様な暮らしのヒントとなる事例を紹介します。



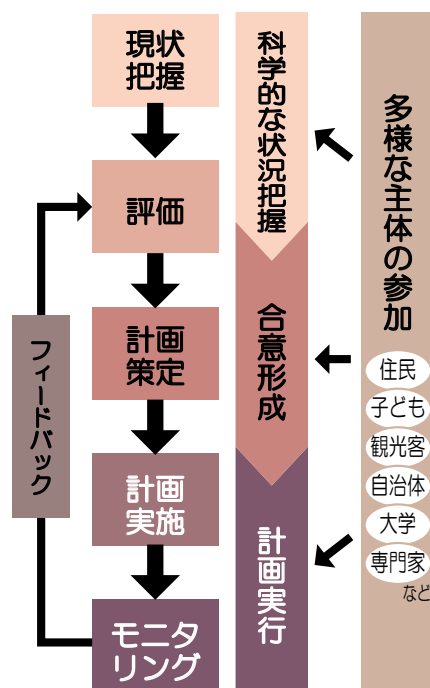
Column2 モデル地区での取り組み 順応的管理システムによる効果的な事業推進

この3つのモデル地区では、右図に示したような、P（計画策定）、D（計画実施）、C（モニタリング）、A（評価）のサイクルを用いた順応的管理システムによる取り組みを実施しています。

例えば、森づくりにおいては、現状把握・分析をもとに計画を策定し、それに基づく管理を実施しています。さらに、ツシマヤマネコ生息数やネズミ類の生息環境調査などの結果をふまえて、管理計画に反映しています。

モニターツアー、米や炭の販売などでも、参加者アンケートや島内外の消費者へのアンケートを実施し、その意見をふまえて体験メニューの改善、価格設定の見直しやパッケージのリニューアルなどを行っています。

これらの取り組みの過程では、住民や観光客の参加、大学や専門家との連携など、多様な主体が関わっています。



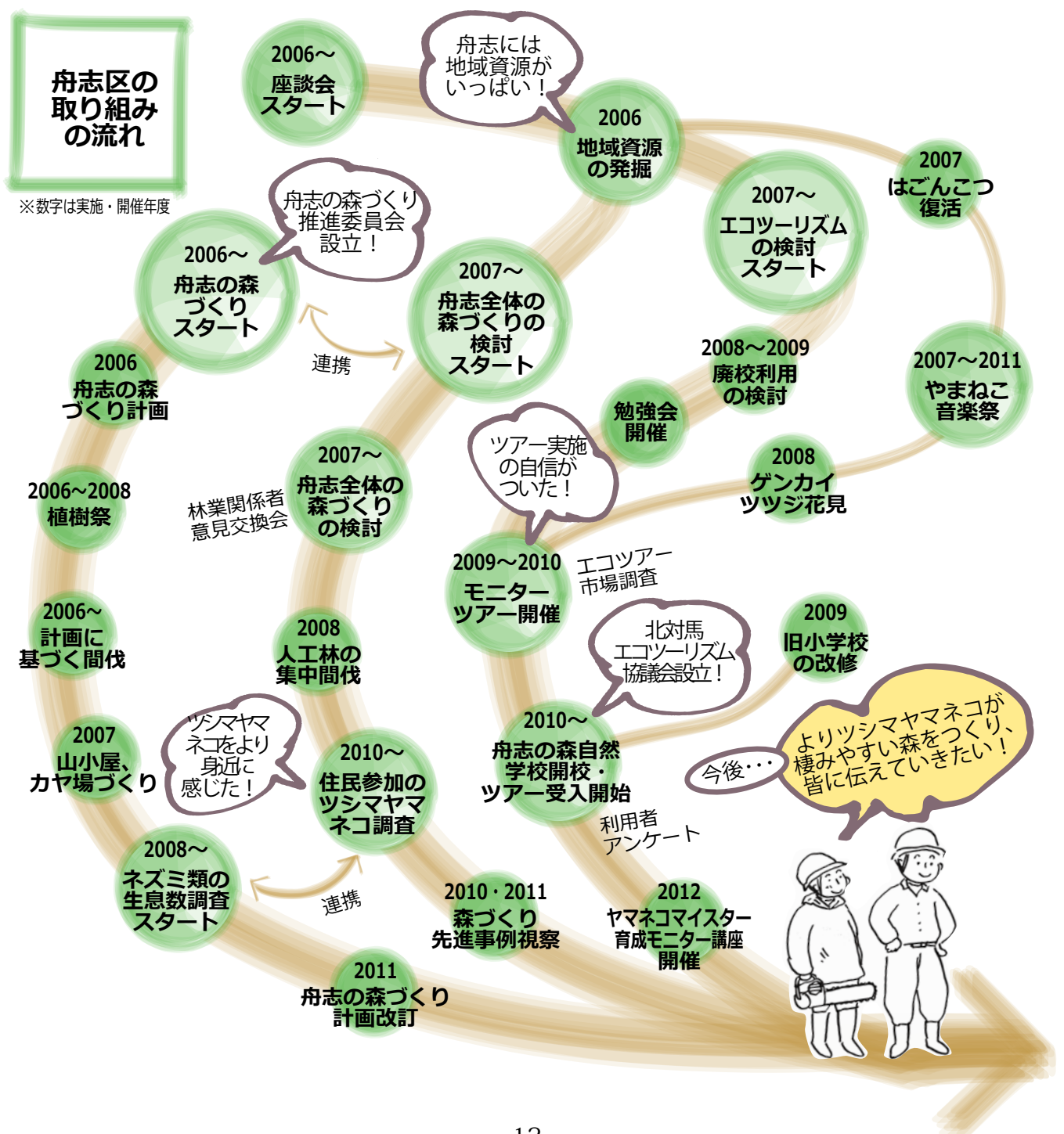
順応的管理システム概念図

モデル地区① 舟志区 森の暮らしのモデルとして

舟志区は、ツシマヤマネコの生息密度が高い地域で、農地が少なく森林が多いことから「ヤマネコに優しい森づくり」を目指して、間伐作業をはじめ、竹林整備や散策道の開設など、地域と連携した森づくり活動が行われています。

ここでは、森林管理状況とヤマネコ生息の状況を調査するとともに、専門家や林業関係者と市の森林計画まで含めた意見交換を行い、事業効果を検証する「順応的管理」が進められています。

また、2010年に廃校を活用した「舟志の森自然学校」が誕生し、住民ガイドによるエコツアーの受け入れも行われ、自然や保護活動等の体験ができる、森の暮らしのモデル地区となっています。



モデル地区② 佐護区 農の暮らしのモデルとして

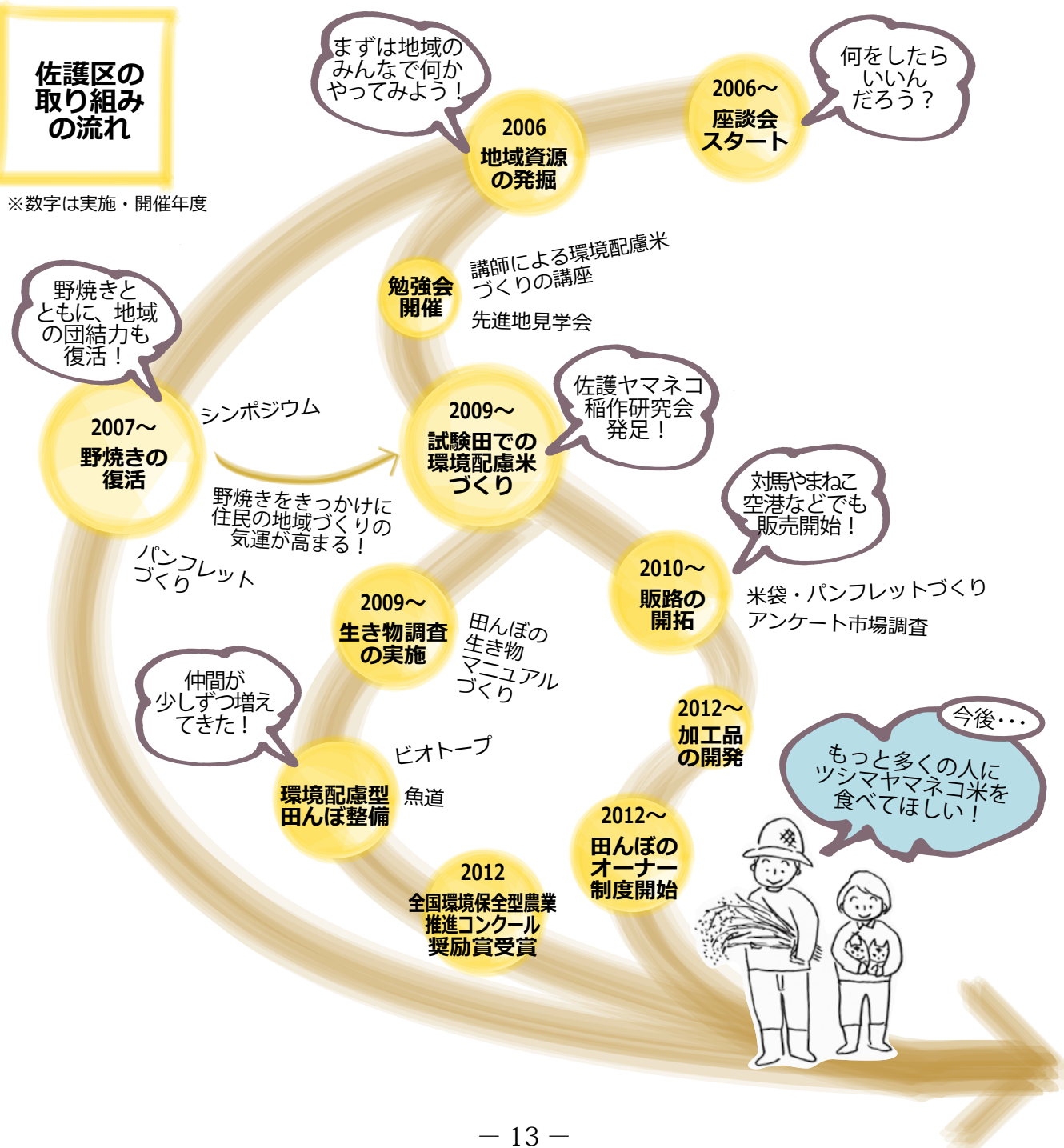
対馬野生生物保護センターがある佐護区はツシマヤマネコの生息密度が高く、対馬最大の稲作地域です。

ここでは2009年にツシマヤマネコをはじめとする希少な野生動植物に配慮した稲作研究を行うことにより、佐護の米のブランド化を図り、水田を維持することを目的として、「佐護ヤマネコ稲作研究会」が設立されました。農薬節減や有機栽培の試験田を設置し、先進地域への視察や、田んぼの生き物調査などを実施してきました。現在では、「佐護ツシマヤマネコ米」として、インターネットでの販売や、オーナー制度の開始など、新しい米作りと販路拡大にチャレンジしており、農の暮らしのモデル地区となっています。



佐護区の取り組みの流れ

※数字は実施・開催年度



モデル地区③ 内山区 里の暮らしのモデルとして

内山区は対馬の下島の南中部に位置し、広葉樹の多い盆地で、かつては巖原（城下町）の薪炭供給地でした。下島ではしばらくツシマヤマネコの生息情報がなく、2007年に23年ぶりで内山の山中で確認されました。環境省ではツシマヤマネコ野生順化ステーションを整備し、野生復帰に向けた生息環境整備の準備を進めています。

ここでは、ヤマネコの餌となる小動物が集まる畑で作った野菜の漬け物、炭焼きに使用する材の伐採による広葉樹の萌芽更新の促進、炭の販売、薬草をテーマにした活動、それらを複合した民泊やグリーンツーリズムなどの実践を視野に入れて活動しており、里の暮らしのモデル地区となっています。

